

時論

天皇の御養育に貢献した

岐阜出身の丸尾錦作先生

京都産業大学名誉教授 所 功

「帝王学」の多様な在り方

この二月二十三日、今上陛下は満六十五歳のお誕生日を健やかに迎えられた。国民の一人として、心からお慶び申し上げたい。

ただ、古代から実施されてきた当代一流の碩学（せきがく）による継続的な「帝王学」は、戦後ほとんど行われていない。それを補うため、今上陛下は学習院中高等科生の頃から上皇陛下のご意向により、東宮御所へ専門家を招き「皇室の歴史」などを受講して来られた。

とはいえ、戦前までのような皇子たちに対するご幼少期からの特別な教育は、絶えて久しいことを、今あらためて考え直す必要がある。そのためには、まず往事の実例を具体的に解明しなければならない。そう思い立って宮内庁編『昭和天皇実録』（既刊）を丹念に読み返した。

それによって知りえた注目すべき人物は、大正天皇と昭和天皇のご幼少期に御養育掛の責任者として献身した丸尾錦作先生にほかならない

（以下敬称を略し「丸尾」と記す）。

丸尾錦作の懸命な刻苦勉強

丸尾錦作（一八五六～一九二五）については、ネット情報などにもかなり詳しい記事が出ている。その大半は、昭和四十四年（一九六九）出身地の岐阜市加納町有志たちが、顕彰碑を建立する際に作られた記念冊子『澄心』所載の「自叙伝」に依る所が大きい。

この冊子を橋本秀雄氏が岐阜市立図書館で見付け、そのコピーを送って下さった。ここにその「自叙伝」と遺族関係者の記述から、丸尾の主要な事績を紹介させて頂こう。

丸尾の父広重は、加納藩の下級武士（三百石取り）、母時子は同藩士根村三四蔵（みよぞう）の次女で、その間に安政三年（一八五八）四月、長男として誕生した。数え八歳ころ、母上より「百人一首」や「いろは」の手習い（習字）を教えられ、十二歳ころから藩学の憲章館で読書、講武所で剣術を修め、儒者の三宅在平から漢学・皇学を学んでいる。

やがて、慶応四年（明治元年（一八六八））十三歳ころ、藩の奉行吟味方で給仕として勤めながら、文学で身を立てようとした。同五年の学制頒布により創立された加納町の小学校で助手となり、大垣に開校された師範学校で修学し、十八歳から三年

間、加納成物小学校の教員を勤めた。しかも、同十年（一八七七）節約のため徒歩で上京し、千代田学校の教員をしながら、性慎義塾で英語と数学を修め東京師範学校に入り、三年間首席で通している。

このような刻苦勉強が実り、同十四年（一八八一）「華族学校」（学習院）の助教採用され、寄宿舎の温習教師と学生監も兼ね、「生徒の修養に努力し・・・品性陶冶（とうや）に尽力した」。しかも五年後（十九年）二十三歳で九州の旧松浦藩校地に開設された猶興館中学へ招かれ、三年間斬新な教育に専念している。

皇子嘉仁親王（大正天皇）の御養育について、同二十二年（一八八九）三十一歳で学習院へ教授として呼び戻され、皇太子明宮（はるのみや）（大正天皇）の御用掛を仰せ付けられた。前任の湯本武比古が皇族に関する教育研究のためドイツ留学に出た後任である。

大正天皇（明宮嘉仁親王）は、明治十二年（一八七九）八月三十一日、天皇（27）と権典侍柳原愛子（なるこ）（24）との間に誕生されたが、幼少時からご病弱であった。

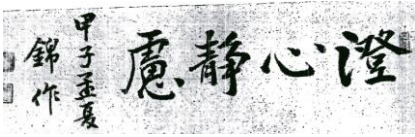
そのため、青山の御所内の御学問所で個人指導を受けてから、学習院初等科に入られたが、中等科一年で退学された。しかし、他の皇子が生

後まもなく夭逝されていたので、唯一の「男系男子」として、十一歳で皇太子に定められた。

その御養育には、ご健康の回復と仁徳の修行を、東宮御所などで注意深く行われなければならない。その大任を担ったのが、小中教育の現場経験が豊かな壮年の丸尾である。

この丸尾がどのように御養育役を果たしていたかは、彼が大正年間に書いた「自叙伝」に、嘉仁親王の立太子後「夏冬の間は、多く熱海又は三保清見寺等に御旅行あり、同地に在りて御教授申し上げ。」「先帝陛下（明治天皇）の教育に関する御留意は・・・余の御教育掛拜命に際しても、特に皇太子の御教育に関しては元田永孚（明治二十四年一月逝去）に聞き正せとの御言葉あり、時々同氏に御教育に関して相談せり・・・」と記すにすぎない。

しかし、実際には相当厳しかったと伝えられる。前掲『澄心』所載の六男令策氏（杉浦家に養子）寄稿文「父を偲びて」に、「父は意志極めて強固・・・厳格な態度で事に臨んでいた」一例として、「大正天皇が東宮（皇太子）時代、父の出した宿題が馬術稽古のため出来なかつた言い訳を、自筆でお書きになった親書（直筆）が「今も家宝として保存されている」とみえる。



丸尾錦作書額 (加納小学校蔵)

そのころ、丸尾は有栖川宮威仁親王と同妃とに従ってドイツ皇太子の結婚式に参列し、イタリア・フランス・オランダ・ベルギーおよびイギリスを訪ね、各国の教育状況を視察している。そして帰国すると、翌三十九年九月(日露戦争直後)、木戸に代わり丸尾が皇孫(両親王)の「御養育掛長」に任命された。

それ以降、丸尾が懸命に奉仕した事績は、宮内庁編『昭和天皇実録』(東京書籍、平成二十九年から刊行、全十八冊)の第一に、かなり詳しく記録されている(その原文抄出稿は、H pかんせいPLAZAに掲載)。たとえば、明治三十九年(一九〇六)六月、皇孫裕仁親王(5)が同令の「御相手」と遊びながら覚えられた「此ヤツ」「ヤイ」「ウン」などの乱暴な言葉使いをされるのに対して、丸尾(49)が、「御使用を慎むべき旨を言上」した。しかし、すぐ直されなかったのか、翌四十年正月、丸尾らにご注意申し上げた時は「暫く御こらへ(我慢)あそばして御聞き」になるよう言上している。

また、同四十一年(一九〇八)四月、学習院初等科に入学された裕仁親王に対し、丸尾は折に触れて「水戸光圀を題材として訓話(翌四十二年三月)」、「教育勅語に関する訓話(翌四十三年正月)」、「前九年前三年の役の小話(同年八月)」などを申し上げると共に、「海軍将旗」や「世界一周双六」のお相手をしたり(同四十四年十月、同四十三年正月)、ご幼少時から興味を持たれた昆虫の勉強に資するため、岐阜市から「名和昆虫研究所」の名和靖所長(53)を招く(同四十三年十二月)など、さまざまな努力をしている。その御養育態度は、相当に厳しかった。

『実録』には第三年度の三学期末(同四十四年三月)、裕仁親王(10)に対して、丸尾が『大学』の一節「身を修むるを以て本と為す」の講話をするのみならず、「御成長に伴ひ…御出入・御食事などの際の御行儀のことなど、種々訓戒」を申し上げたとある。しかも、たとえば、庭遊びで夢中になって帰りが遅くなられると、「時間をお忘れになるとは何事ですか。うちへお入れしません」と叱り、しばらく仁王立ちしていたと伝えられる(河瀬弘至氏「孤高の母后貞明皇后」産経新聞社、平成三十年)。

また、これに機に皇嗣(皇位継承者)の裕仁親王と、弟君の雍仁・宣仁両親王とは、「御殿を別」とされることになった。そのため、丸尾は双方の連絡役も務めている。京都へ修学で行啓の際には、大覚寺で「南北朝和睦の話」を申し上げている(大正二年四月二日)。

さらには、大正三年(一九一四)春、裕仁親王(13)が学習院初等科を卒業され、特設の「東宮御学問所」(七年制)へ進まれたので、丸尾は御養育の傳育官長を辞し「宮中顧問官」を仰せ付けられた。

それゆえ、東宮教育に直接関与することはなくなったが、以後十年近く折あるごとに参殿して、皇太子と親しく「御歓談」に及び「御陪食」も賜っている。

この丸尾は今から丁度百年前の大正十四年五月四日、満六十九歳で他界した。杉浦令策氏の寄稿文によれば、「晩年の父は、仏道に関心を持ち、また好きな囲碁・撞球(ビリヤード)を楽しんで暮らし…赤坂離宮の見える紀尾井町の家で静かにその生涯を閉じ」たと記されている。

当時の心境と信条は、大正十三年(甲子)揮毫の「澄心静慮」(心を澄まして静かに慮る)によく表されていると思われる。

「皇孫裕仁親王御養育掛長の実績」
ご病弱な少年皇太子は、この丸尾だけでなく、明治三十一年(一九〇九)から「東宮賓友(ひんゆう)」に任じられた有栖川宮十代威仁親王(一八六二〜一九一三)の努力もあって、段々と健康になられた。

おかげで、同三十三年五月、九条節子(さだこ)(道孝公爵四女)と結婚されて、翌三十四年(一九〇一)四月二十九日に第一皇子裕仁(ひろひと)親王、翌三十五年六月二十五日、第二皇子雍仁(やすひと)親王を儲けておられる(同三十八年一月に宣仁(のぶひと)親王、十年後の大正四年十二月に崇仁親王も誕生)。

そこで、裕仁親王と雍仁親王は、お誕生直後から明治天皇の信任篤い川村純義伯爵に預けられたが、川村の逝去により青山の皇孫御殿へ戻された。それから一年余り、両親王の御養育にあたったのは、東宮侍従長の木戸孝正(孝允の養子)である。

そのころ、丸尾は有栖川宮威仁親王と同妃とに従ってドイツ皇太子の結婚式に参列し、イタリア・フランス・オランダ・ベルギーおよびイギリスを訪ね、各国の教育状況を視察している。そして帰国すると、翌三十九年九月(日露戦争直後)、木戸に代わり丸尾が皇孫(両親王)の「御養育掛長」に任命された。

それ以降、丸尾が懸命に奉仕した事績は、宮内庁編『昭和天皇実録』(東京書籍、平成二十九年から刊行、全十八冊)の第一に、かなり詳しく記録されている(その原文抄出稿は、H pかんせいPLAZAに掲載)。

たとえば、明治三十九年(一九〇六)六月、皇孫裕仁親王(5)が同令の「御相手」と遊びながら覚えられた「此ヤツ」「ヤイ」「ウン」などの乱暴な言葉使いをされるのに対して、丸尾(49)が、「御使用を慎むべき旨を言上」した。しかし、すぐ直されなかったのか、翌四十年正月、丸尾らにご注意申し上げた時は「暫く御こらへ(我慢)あそばして御聞き」になるよう言上している。

また、同四十一年(一九〇八)四月、学習院初等科に入学された裕仁親王に対し、丸尾は折に触れて「水戸光圀を題材として訓話(翌四十二年三月)」、「教育勅語に関する訓話(翌四十三年正月)」、「前九年前三年の役の小話(同年八月)」などを申し上げると共に、「海軍将旗」や「世界一周双六」のお相手をしたり(同四十四年十月、同四十三年正月)、ご幼少時から興味を持たれた昆虫の勉強に資するため、岐阜市から「名和昆虫研究所」の名和靖所長(53)を招く(同四十三年十二月)など、さまざまな努力をしている。その御養育態度は、相当に厳しかった。

『実録』には第三年度の三学期末(同四十四年三月)、裕仁親王(10)に対して、丸尾が『大学』の一節「身を修むるを以て本と為す」の講話をするのみならず、「御成長に伴ひ…御出入・御食事などの際の御行儀のことなど、種々訓戒」を申し上げたとある。しかも、たとえば、庭遊びで夢中になって帰りが遅くなられると、「時間をお忘れになるとは何事ですか。うちへお入れしません」と叱り、しばらく仁王立ちしていたと伝えられる(河瀬弘至氏「孤高の母后貞明皇后」産経新聞社、平成三十年)。

また、これに機に皇嗣(皇位継承者)の裕仁親王と、弟君の雍仁・宣仁両親王とは、「御殿を別」とされることになった。そのため、丸尾は双方の連絡役も務めている。京都へ修学で行啓の際には、大覚寺で「南北朝和睦の話」を申し上げている(大正二年四月二日)。

さらには、大正三年(一九一四)春、裕仁親王(13)が学習院初等科を卒業され、特設の「東宮御学問所」(七年制)へ進まれたので、丸尾は御養育の傳育官長を辞し「宮中顧問官」を仰せ付けられた。

それゆえ、東宮教育に直接関与することはなくなったが、以後十年近く折あるごとに参殿して、皇太子と親しく「御歓談」に及び「御陪食」も賜っている。

この丸尾は今から丁度百年前の大正十四年五月四日、満六十九歳で他界した。杉浦令策氏の寄稿文によれば、「晩年の父は、仏道に関心を持ち、また好きな囲碁・撞球(ビリヤード)を楽しんで暮らし…赤坂離宮の見える紀尾井町の家で静かにその生涯を閉じ」たと記されている。

当時の心境と信条は、大正十三年(甲子)揮毫の「澄心静慮」(心を澄まして静かに慮る)によく表されていると思われる。